# 「花燃えんと欲す」の系譜

後藤秋正

## はじめに

『唐詩選』にも収録されていて、人口に膾炙している杜甫の「絶句二首」〈其二〉（『杜詩詳注』巻一三。以下、『詳注』）は、次のように詠じられる。[1]

江碧鳥逾白　江碧にして鳥　逾（いよいよ）白く
山青花欲燃　山青くして花燃えんと欲す
今春看又過　今春　看（みすみす）又過ぐ
何日是帰年　何れの日か是れ帰年ならん

『詳注』に引く黄鶴の注によれば、時に広徳二年（七六四）、杜甫にとっては蜀地に入ってから迎える五度目の春であった。一篇は、『詳注』が明・周甸『杜釈会通』を引いて、「身在他郷、帰去無期、所触皆成愁思矣。」（身は他郷に在りて、帰去するに期無し、触るる所皆な愁思を成す。）と言っているように、望郷の念を詠出することに眼目がある。

この詩の特徴はまず、絶句でありながら、起句と承句が対句で構成されていることが挙げられよう。春景が対句によって描写されることによって、「愁思」が際立つのである。また、色彩の対比が鮮明であることも挙げられる。例えば朱宝瑩『詩式』は次のように指摘している。[2]

因江碧而覚鳥之逾白、因山青而顕花之色紅、此十字中有多少層次、可悟錬句之法。而老杜因江山花鳥、感物思帰、一種神理、已躍然於紙上。

江碧なるに因りて鳥の逾白きを覚え、山青きに因りて花の色の紅なるを顕（あきら）かにす、此の十字の中に多少の層次有り、錬句の法を悟る可し。而して老杜は江山花鳥に因り、物に感じ帰るを思う、一種の神理、已に紙上に躍然たり。

この詩に解説を加える書物は多いが、まず太田青丘『唐

詩入門』[3]の指摘を引こう。

一二句は景、三四句は情。景より触発されて情に及ぶのである。折しも陽春の候、江水は紺碧に澄み、これを横切って飛ぶ鳥は、江水に映発して愈々白く際立ち、新緑の山は青くそばだち、点々としてこれを彩る花は燃えるばかり紅あざやかに見渡される。ここには碧、白、青、紅という色彩感の鮮やかさがあるばかりではない。逾〻白しと言い、燃（然）えんとすと言う語の、じかに生命に触れてくる切迫感を見逃してはならない。普段ならば心を楽しませるこの春景も、今はいたずらに心を痛ましめる種だという、この衝迫感が、直ちに第三・四句の感慨を喚起してくるのである。

また鈴木修次『漢詩』[4]は、一二句を「川のふかみどりに、鳥はいよいよその白さを増し、黒ずんだみどりの山（を背景に）、花は燃えようとしている。」と訳し、「色彩の対比がまことに鮮やかである。青黒い山を背景にした、燃えるような花というのは、うすずみ色とまっかな色との対比。第一句の『碧』と『白』との対比に応じている。」と指摘している。確かに杜甫以前には川の碧と山の青とを対比させた詩は見出せないようである。葛立方『韻語陽秋』巻四において、五律「雨四首」〈其一〉（『詳注』巻二〇）の頷聯と比較しながら次のように指摘するのも、色彩の対比に着目したからであろう。

老杜雨詩云、紫崖奔処黒、白鳥去辺明、而江碧鳥逾白、山青花欲燃之句、似之。

老杜の雨の詩に云う、紫崖は奔る処に黒く、白鳥は去る辺に明らかなりと、而して江碧にして鳥逾白く、山青くして花燃えんと欲すの句は、之に似る。

しかし、鮮やかな色彩の対比ばかりではなく、「花欲燃（然）」という表現を用いて、過ぎゆく春を惜しむかのように真っ赤に咲く花を巧みに描写していることも、この詩を印象深いものにしているのではないだろうか。では、杜甫はどこからこのような発想を得たのであろうか。また、こうした表現はどのように継承されていったのであろうか。以下、主として「花欲燃」という表現に焦点を当てて、若干の考察を試みたい。

## 一 唐代以前の用例

『詳注』は承句の典拠として、まず梁の元帝・蕭繹（五〇八～五五四）の「宮殿名詩」（『芸文類聚』巻五六、『全梁詩』巻二五。逯欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』による。以下、同じ。）から次の句を引く。

林間花欲然　林間　花然えんと欲し
竹径露初円　竹径　露初めて円かなり

この詩は「合歓」「葡萄」などといった宮殿の名を配した遊戯的な詩であり、この句も実景を描写したものではなかろう。

さらに『詳注』は庾信（五一三～五八一）の「奉和趙王隠士」（『芸文類聚』巻三六、『全北周詩』巻二）から、次の句も引いている。[5]

野鳥繁絃囀　野鳥　繁絃のごと囀（さえず）り
山花焔火然　山花　焔火のごと然ゆ

これは「隠士」の住む山中の風景を想像したものであり、これも実景を捉えたものではないだろう。

では唐代以前には、ほかに類似した表現は見出せないのであろうか。

宋の孝武帝（在位四五三～四六四）の時の人である湯恵休（釈恵休）の「白紵歌三首」〈其二〉（『全宋詩』巻六）には次の句がある。[6]

少年窈窕舞君前　少年　窈窕として君前に舞い
容華豔豔将欲然　容華　豔豔として将に然えんと欲す

あでやかに舞う美女の容姿が燃え立つように美しい、と言うのであって、花の描写ではない。ついで范雲（四五一～五〇三）の「閨思」（『全梁詩』巻二）に次の句が見えている。

積恨顔将老　恨みを積んで顔は将に老いんとし
相思心欲然　相い思いて心は然えんと欲す

詩題が示すように夫と別れている妻の悲しみを詠ずる詩であり、夫との別れを恨んで容貌は衰えようとし、夫を思慕するあまり、心は燃え立つように熱くなるというのである。心が燃えそうだという表現は当時としては斬新な表現だったであろうが、他の詩人に影響を与えた痕跡はほとんど見出せない。[7]

ところで『詳注』は引かないが、明・胡震亨『唐音癸籤』巻十は次のように指摘する。

杜山青花欲燃、出沈約山桜花欲燃。
杜の山青くして花燃えんと欲すは、沈約の山桜　花燃えんと欲すより出づ。

沈約（四四一～五一三）の「早発定山」（『文選』巻二七）には、次の句がある。

野棠開未落　野棠は開いて未だ落ちず
山桜発欲然　山桜は発（ひら）きて然えんと欲す

李善はこの句に注を付さないが、李周翰の注は、「棠・桜皆果木名、而開発其花也。花朱色如火欲然也。」（棠・桜

は皆な果木の名にして、其の花を開き発くなり。花は朱色にして火の然えんと欲するが如きなり。）と説明する。この詩は隆昌元年（四九四）、沈約が東陽太守として赴任する途中、定山を発った時の作であり、炎が赤く燃え立つような「山桜」は、定山のふもとに咲いていたものである。沈約の句は実景を詠じたと考えられるから、杜甫がこの詩を念頭に置いたとする胡震亨の指摘は正しいと思われる。確かに沈約「早発定山」や元帝・蕭繹「宮殿名詩」、庾信「奉和趙王隠士」などが、花が燃え立つように咲いていることを詠ずる嚆矢となった作品であろう。ただし沈約の句は、やまなしの花とゆすらうめの花を詠じて、対句になってはいても、色彩豊かな描写とは言えない。

補足しておくならば、沈約「早発定山」については『古詩紀』（四庫全書本）巻百五十に、宋・龐元英『談叢』から次のような逸話が引かれている。[8]

梁奉朝請呉均有才器。……均又為詩曰、秋風瀧白水、雁足印黄沙。沈隠公約語之曰、印黄沙語太険。均曰、亦見公詩云、山桜発欲然。約曰、我姑欲然、卿已印訖。

梁の奉朝請呉均は才器有り。……均又詩を為りて曰く、秋風　白水に瀧く、雁足　黄沙に印すと。沈隠公約　之に語りて曰く、黄沙に印すの語は太だ険なりと。均曰く、亦公の詩を見るに云う、山桜　発きて然えんと欲すと。約曰く、我は姑く然えんと欲すというに、卿は已に印し訖われりと。

ここに引かれる呉均の詩は散佚して見られない。沈約が「印黄沙」という描写は奇異であると評したところ、呉均は沈約の「発欲然」というのも同様だと反論した。沈約は、私は花が燃えそうだと比喩的に描写しているのに対して、君は雁の足跡が印されてしまったと言っているではないかと応じた、というのであろう。最後の沈約の発言の真意は分かりにくいが、これが事実だとすれば沈約の「発欲然」という表現は、彼の生前に既に注目されていたことになる。

南北朝期にはほかにも花が燃えるようだという表現が見られる。呉尚野「詠鄰女楼上弾琴」（『全陳詩』巻九）は次のように詠じられる。[9]

青楼誰家女　青楼　誰が家の女ぞ
開牕弄碧弦　牕を開いて碧弦を弄す
貌同朝日麗　貌は朝日の麗しきと同しく
装競午花然　装いは午花の然えんとすると競う

午花は真昼に咲く花。琴を弾く美女の装いが真昼の燃え立つような花と妍を競っているというのである。また陳の太建年間（五六九～五八二）に四十九歳で没した張正見の

「衰桃賦」（『芸文類聚』巻八六）には、「爾迺万株成錦、千林似翼、苔画波文、花然樹色。」（爾（なんじすなわ）ち万株　錦を成し、千林　翼の似（ごと）く、苔は波文を画き、花は樹色を然やす。）と言う。桃の花が樹々を燃え立たせるようだと言うのであろう。

このように見てくると花が燃えるように真っ赤に咲いているという描写は、南朝・梁の時期までには成立していたと考えられる。「燃えんと欲す」という表現は、美女の姿態や伴侶を恋い慕う心情にも用いられることはあったが、『文選』に収録されたこととも相俟って、沈約「早発定山」における花の描写が人々の関心を呼んだのではないだろうか。(10)

## 二　唐代の用例

ついで唐代における「花欲燃」と、これに類似した描写について見てみよう。

虞世南（五五八～六三八）の五律「侍宴応詔、賦韻得前字」（『全唐詩』巻三六）の頷聯と頸聯は次のように詠じられる。

横空一鳥度　空を横ぎって一鳥度（わた）り
照水百花然　水を照らして百花然ゆ
緑野明斜日　緑野　斜日明らかに
青山澹晩烟　青山　晩烟澹（あわ）し

禁苑の水辺に咲く花々が燃えるようだと言うのは、花自体の色彩だけではなく、夕陽に照らされているためでもあろう。一句に構成されるわけではないが、頸聯における緑と青の対比が注意される。

宋之問（六五六？～七一二）の「酰郡斎海榴」（全二二句、『全唐詩』巻五二）は、景竜三年（七〇九）の秋、越州長史として左遷された宋之問が、翌年の初夏に詠じた詩である。この年の六月にはさらに欽州へと遷されている。

9清晨緑堪佩　清晨　緑は佩（お）ぶるに堪え
10亭午丹欲然　亭午　丹は然えんと欲す
……　……
19徒縁滞遐郡　徒（いたづら）に縁りて遐郡に滞り
20常是惜流年　常に是れ流年を惜しむ

海榴は石榴に同じ。ざくろ。緑と丹の対比が鮮明であり、真昼の陽光を浴びたざくろの橙赤色が燃えんばかりであるというのだが、左遷されて一年が経とうとしているのに長安へ復帰することはかなわないという悲哀がこめられているのであろう。

次に張九齢（六七三～七四〇）の「冬中至玉泉山寺、属

窮陰氷閉、崖谷無色、及仲春行県、復往焉、故有此作」（全一六句、『全唐詩』巻四七）を見よう。

5万木柔可結　万木　柔らかにして結ぶ可く
6千花敷欲然　千花　敷て然えんと欲す
7松間鳴好鳥　松間　好鳥鳴き
8林下流清泉　林下　清泉流る

開元二十五年（七三七）、荊州長史に左遷された張九齢が翌年の春、玉泉山の麓の寺を尋ねた時の作である。第六句について、熊飛『張九齢集校注』（中華書局、二〇〇八）は、「百花斉放、都如欲燃之火。」と言う。[11] 多くの花々が燃えそうに咲き誇っているというのである。

王維（六九九～七六一）の七律「輞川別業」（『全唐詩』巻一二八）には次の句がある。首聯と頷聯を引こう。

不到東山向一年　東山に到らざること向ど一年
帰来繚及種春田　帰来　繚かに春田を種うるに及ぶ
雨中草色緑堪染　雨中の草色　緑染むるに堪え
水上桃花紅欲然　水上の桃花　紅然えんと欲す

『王右丞集箋注』巻十が「欲然」について、元帝・蕭繹の「宮殿名詩」を引いているように、第四句にこれが踏まえられていることは確かである。また王維の詩にはこの詩のように、緑と紅を対にする句がしばしば見られる。「山居即事」（『全唐詩』巻一二六）には、「緑竹含新粉、紅蓮落故衣」（緑竹　新粉を含み、紅蓮　故衣を落とす）と言い、「田家」（『全唐詩』巻一二七）には、「夕雨紅榴拆、新秋緑芋肥」（夕雨　紅榴拆け、新秋　緑芋肥ゆ）と言う。[12] しかし、杜甫のように碧と青を対にする例はない。

杜甫が「絶句二首」のほかに、碧と青を対にする例もここで見ておこう。

碧海真難渉　碧海　真に渉り難く
青雲不可梯　青雲　梯す可からず

「奉贈太常張卿　二十韻」（『詳注』巻二）

叢篁低地碧　叢篁　地に低れて碧に
高柳半天青　高柳　天に半ばして青し

「秦州雑詩二十首」〈其九〉（『詳注』巻七）

六月青稲多　六月　青稲多く
千畦碧泉乱　千畦　碧泉乱る

「行官張望、補稲畦水帰」（『詳注』巻一九）

青松寒不落　青松　寒くして落ちず
碧海濶逾澄　碧海　濶くして逾澄む

「寄劉峡州伯華使君四十韻」（同前）

杜甫が碧と対にして青を用いた際の、青いと表現された対象は海、柳、稲、松であって、対象が重複することはな

い。こうした点にも杜甫の作詩上の周到な配慮がうかがわれよう。

引き続き「然えんと欲す」について見ておこう。

劉長卿（？～七八六？）の至徳二載（七五七）の作、「雑詠八首、上礼部李侍郎、晩桃」（『全唐詩』巻一四八）には次の句がある。

四月深澗底　四月　深澗の底
桃花方欲然　桃花　方に然えんと欲す

この詩では、燃えそうな花は桃花であること、季節は四月であることが明示されている。

李白（七〇一～七六二）の詩ではどうであろうか。「寄韋南陵冰、余江上乗興訪之、遇尋顔尚書笑有此贈」（『全唐詩』巻一七二）を見よう。

月色醉遠客　月色　遠客を酔わしめ
山花開欲然　山花開きて然えんと欲す

李白はこの詩では「山花」と言うが、「安州応城玉女湯作」（『全唐詩』巻一八一）では、

気浮蘭芳満　気浮かんで蘭芳満ち
色漲桃花然　色漲りて桃花然ゆ

と言っていて、桃花であることが分かる。杜詩の花も桃の花ではなかったか。(13)

岑参（七一七？～七六九）の五律「高冠谷口招鄭鄠」（『全唐詩』巻二〇〇）には、夕暮れの雨の中、燃えるように咲く谷間の花が描かれる。

澗花然暮雨　澗花　暮雨に然え
潭樹煖春雲　潭樹　春雲に煖かなり

劉開揚『岑参詩集箋注』（巴蜀書社、一九九五）は、「句言雨後渓花紅如火。」と言うが、必ずしも「雨後」ととる必要はなかろう。詩題に言う谷口が鄭子真の隠れたとされる場所であるとすれば、銭起「暮春帰故山草堂」（『全唐詩』巻二三九）に、「谷口春残黄鳥稀、辛夷花尽杏花飛」（谷口　春残なれて黄鳥稀に、辛夷　花尽きて杏花飛ぶ）と言うから、谷口には様々な花が咲いていたのであろう。同じく岑参の五律「春日、醴泉杜明府承恩五品宴席上賦詩」（『全唐詩』巻二〇〇）には次のような表現がある。

青袍移草色　青袍　草色を移し
朱綬奪花然　朱綬　花の然えんとするを奪う

この句は、天宝十三載（七五四）二月、五品官となった杜明府が、以前の緑色の官服を脱いで青い官服を着、花が燃え立つような朱色の印綬を佩びることを詠ずる。(14)

韓翃（天宝一三載〈七五四〉の進士）の五律「送蔣員外端公帰淮南」（『全唐詩』巻二四四）には次のように言う。

光風千日暖　光風　千日暖かに
寒食百花燃　寒食　百花燃ゆ

寒食の期間に花が燃えるように咲くという描写は、盧綸（七四八？～七九八？）の五律「舟中寒食」（『全唐詩』巻二八〇）にも見えている。これも引いておこう。

闘鶏沙鳥異　鶏を闘わして沙鳥異なり
禁火岸花燃　火を禁じて岸花燃ゆ

どちらの詩も、寒食には火食をしないのだから火気はないはずなのに、花々は火が燃えるように赤いというのである。[15] もう少し用例を追ってみよう。

張登（？～八〇八？）の「小雪日、戯題」（『万首唐人絶句』巻二六、『全唐詩』巻三一三）には次の句がある。

甲子徒推小雪天　甲子　徒（いたず）らに推す小雪の天
刺桐猶緑槿花然　刺桐　猶お緑にして槿花然ゆ

刺桐は、とべら、とびらのき。海桐花、山芙蓉とも言う。槿花は、むくげの花。一句は、立冬を過ぎて小雪になっても常緑樹であるとべらは緑を保っているし、むくげの花も燃えそうに赤いことを言う。

韓愈（七六八～八二四）の「詠燈花、同侯十一」（『全唐詩』巻三四四）から冒頭部分を引こう。

今夕知何夕　今夕　知る何の夕べぞ
花然錦帳中　花は然ゆ錦帳の中
自能当雪暖　自ずから能く雪に当って暖かし
那肯待春紅　那（なん）ぞ肯えて春を待ちて紅ならん

燈花は灯心の燃え残りが花の形に固まったもの。これができると縁起が良いとされた。とばりの中で花が燃えるというのは、燈花がさまざまな色彩を放っていることに喩えている。『昌黎先生集』巻十に、闕名『雪浪斎日記』が、「此詩、極似少陵。」（此の詩は、極めて少陵に似る。）と指摘するのを引くが、これは杜甫の五律「独酌成詩」（『詳注』巻五）の起聯に、「燈花何太喜、酒緑正相親」（燈花に何ぞ太（はなは）だ喜べる、酒緑にして正に相い親しむ）とあることによるのであろう。

劉禹錫（七七二～八四二）の「韓十八侍御見示岳陽楼別竇司直詩、因令属和、重以自述、故足成六十二韻」（『全唐詩』巻三五五）には、第七十九句・八十句に次のようにある。

紅袖花欲然　紅袖　花然えんと欲し
銀燈昼相似　銀燈　昼相い似たり

韓十八侍御は韓愈のこと。韓愈「岳陽楼、別竇司直」（『全唐詩』巻三三七）に付された原注に、「竇庠時以武昌幕権岳州、愈移江陵法曹、道出岳陽楼作。」（竇庠（とうしょう）　時に武

昌の幕を以て岳州に権たり、愈　江陵法曹に移らんとし、道　岳陽楼に出でて作る。）とある。劉禹錫の詩は、江陵でこれに和したものである。時に永貞元年（八〇五）十一月、連州刺史から朗州司馬へと遷される途中であった。ここに引いた二句は、送別の宴で舞う妓女の赤い袖は花が燃えるようであり、銀の燭台の燈火は昼間のように明るいことを言う。

薛逢（会昌元年〈八四一〉の進士）の「鑷白曲」（全三六句。『全唐詩』巻五四八）は嘉州刺史として蜀地に赴任したことを詠ずる。鑷白とは、毛抜きで白髪を抜き取ること。引用部分は長安を旅立った際の情景を述べる。

長安六月塵亘天　長安　六月　塵　天を亘（わた）る
池塘鼎沸林欲燃　池塘は鼎の沸くがごとく林は燃えんと欲す

池塘の句は、長安の残暑の厳しさを言うものであり、林の花が燃えそうであると言うのも、暑さを強調する表現になっている。

咸通の十哲に数えられる周繇（咸通一三年〈八七二〉の進士）の「詠蛍」[16]（『全唐詩』巻六三五）を見よう。

乱飛同曳火　乱飛して同（とも）に火を曳き
成聚却無烟　成聚して却って烟無し
微雨灑不滅　微雨　灑ぐも滅（き）えず
軽風吹欲燃　軽風　吹いて燃えんと欲す

蛍の放つ光が燃えそうだという表現は斬新ではあるが、先例がある。これは梁の元帝・蕭繹「詠蛍火」（『全梁詩』巻二五）に、「到来燈下暗、翻往雨中然」（燈下に到り来れば暗く、翻って雨中に往けば然えんとす）とあるのに基づいて発想されたものであろう。杜甫にも「蛍火」（『詳注』巻七）という五言絶句があるが、これに類似した描写はない。

## 三「山青」についての杜甫以前の用例

ここまで「花欲然」について見てきたが、「山青」という、一見何の変哲もなさそうな描写も、それほど多くの先例があるわけではない。六朝期にはわずかに何遜（四八二？～五二二）の「登石頭城」（『全梁詩』巻八）に、「天暮遠山青、潮去遥沙出」（天暮れて遠山青く、潮去って遥沙出づ）という類似した描写があるに過ぎないし、唐代に入っても用例は少ない。いくつかの例を引いてみよう。

草緑山無塵　草は緑にして山に塵無し
山青楊柳春　山は青し楊柳の春

劉希夷「帰山」（『全唐詩』巻八二）

倏雲収兮雨歇　倏雲は収まって雨歇み
山青青兮水潺湲　山は青青として水潺湲たり

王維「魚山神女祠歌、送神」（『全唐詩』巻一二五）

山青遠樹滅　山青くして遠樹を滅し
水緑無寒煙　水緑にして寒煙無し

李白「秋登巴陵望洞庭」（『全唐詩』巻一八〇）

鬢白未曾記日月　鬢白くして未だ曾て日月を記せず
山青毎到識春時　山青くして到る毎に春時を識る

高適「寄宿田家」（『全唐詩』巻二一三）

杜甫自身は「山青」という表現を「絶句二首」以外に一度だけ用いている。最晩年の大暦五年（七七〇）、潭州の舟中での作「小寒食、舟中作」（『詳注』巻二三）の末聯に次のように言う。

雲白山青万余里　雲は白く山は青し万余里
愁看直北是長安　愁えて看る直北は是れ長安

宋・胡仔『漁隠叢話前集』巻六と宋・蔡夢弼『草堂詩話』巻上は范元実『詩眼』を引いて、この一聯が沈佺期の「雪白山青千万里、幾時重謁聖明君」（雪は白く山は青し千万里、幾時か重ねて聖明の君に謁せん）という句を踏襲すると指摘している。しかし、沈佺期の「遥同杜員外審言過嶺」（『全唐詩』巻九六）には、「両地江山万余里、何時重謁聖明君」（両地　江山　万余里、何れの時か重ねて聖明の君に謁せん）という類似した句があるものの、同じ句は沈佺期の詩には見出せない。つまり、「山青」という表現もありきたりのものではないことが窺われる。また「小寒食、舟中作」に即して言えば、白い雲が浮かび、青い山が横たわっているという描写は、そのまま郷里、あるいは長安や洛陽との無限の距離を示していることになろう。したがって杜甫が「山青花欲燃」と言った時には、その山は郷里と自分の現在の居所とを隔てている存在であるという認識もあったのではなかろうか。

## おわりに

宋・王楙『野客叢書』巻十九は次のように述べる。

沈約詩、山桜花欲燃、杜詩、山青花欲燃、杜詩合古人之意、往往若此、注所不聞。

沈約の詩に、山桜　花燃えんと欲すと、杜詩に、山青くして花燃えんと欲すと、杜詩の古人の意に合うこと、往往にして此の若し、注の聞かざる所。

王楙の指摘を待つまでもなく、確かに杜甫の詩は沈約「早発定山」を踏まえるのであろう。従ってこのような表現の系譜をたどるならば、沈約から庾信へ、さらに初唐期

の張九齢・宋之問を経て王維に至り、そしてまた李白から杜甫へと継承されていったということになろう。

このように「花欲然」という描写は杜甫の独創になるものではない。しかし、沈約の句は、山桜という花の種類を記すために、燃えるという赤色の表現と重複するきらいがある。対句としての白と燃（赤・紅）という対比、さらに一句中の青と燃との対比、この色彩感にあふれる対比こそが杜甫の創見なのである。しかもこの句は単なる春の讃歌に終わらず、転句、そして結句にいたり、いわば意外性をもって痛切な望郷の念へと展開する、杜甫ならではの表現となっている。

さて唐代以降も「花欲燃」という表現はしばしば見られる。いくつかの例を引いておこう。

北宋の彭汝礪（一〇四二～一一〇二）の「察院学士灸炳連日戯作鄙句」（『鄱陽集』巻一）には、次の句がある。

三月人家花欲燃　三月　人家　花燃えんと欲し
陽春水色碧於天　陽春　水色　天より碧なり

花に碧を配するところから見て、杜詩を念頭に置いている可能性が高い。

北宋から南宋初期にかけての人、黄公度（一一〇九～一一五六）の「送陳応求赴官」（『知稼翁集』巻上）にも次の句が見られる。

刺桐古城花欲燃　刺桐の古城　花燃えんと欲し
旧遊人物想依然　旧遊の人物　想うこと依然たり

この句は先に見た張登「小雪日、戯題」を踏まえるかもしれない。

明代に入っても用例は見られるが、明・沈季友撰『檇李詩繫』巻十一には、正徳年間（一五〇六～一五二一）の人である沈祐（紫硤山人）の「秋日同孫太初・董子言・陳用明・僧雪江散歩湖上、以老杜山青花欲然分韻、得然字」（秋日　孫太初・董子言・陳用明・僧雪江と同に湖上を散歩し、老杜の山青くして花然えんと欲すを以て韻を分かち、然の字を得たり）という五言律詩があり、詩題のとおり、末聯に然を韻字として用い、次のように詠ずる。

遅留不知晩　遅留して晩を知らず
疎樹一燈然　疎樹　一燈然ゆ

このことは明代に至っても杜甫「絶句二首」の「山青くして花然えんと欲す」という句が好尚の対象とされていた証拠となるであろう。

注

（1）『御選唐詩』巻二六は二篇に分け、〈其一〉を「絶句」、〈其二〉

を「客中作」と題し、『万首唐人絶句』巻一は、「絶句十二首」の〈其三〉とするなどの異同がある。また、承句を「花欲然」に作る諸本もある。

(2) 引用は富寿蓀選注『千首唐人絶句』(上海古籍出版社、一九八五)によった。

(3) 河出文庫、一九五五、六版。

(4) 学燈文庫、一九八八、五版。

(5) 『御選唐詩』もこの二篇の詩を典拠として引く。

(6) 湯恵休については『宋書』巻七一にわずかな記述が残されるのみである。仏門に入ったが、劉宋の孝武帝(在位四五三~四六四)に還俗を命じられ、官は揚州従事史に至った。

(7) その後、例えば蘇舜欽(一〇〇八~一〇四八)の「秀州城外九里有竹樹小橋、予十八年前、与友人解晦叔飲別於此、今過之、景物依然而解生已亡、悲歎不足、復成小詩」(『蘇学士文集』巻七)に、「君埋塵土骨応化、我逐風波心欲燃」(君塵土に埋むれば骨応に化すべし、我 風波を逐いて心燃えんと欲す)とある。友人の死を悲嘆して、心が燃えそうに痛むというのである。

(8) 『太平広記』巻一九八、「沈約」の条にも『談叢』を出典として引かれるが、末尾を「約曰、我始欲然、即已印訖。」に作っている。

(9) 呉尚野の詩はこの一首だけしか残らず、事跡については不詳。

(10) 劉勰(四六六?~五二〇?)の『文心雕龍』夸飾三七には次の一節がある。

至如気貌山海、体勢宮殿、嵯峨掲業、熠耀焜煌之状、光采煒煒而欲然、声貌岌岌其将動矣。

気の山海を貌り、体の宮殿を勢し、嵯峨 掲業、熠耀焜煌の状の如きに至っては、光采は煒煒として然えんと欲し、声貌は岌岌として其れ将に動かんとす。

これは山や海、宮殿などを描写した漢代の賦が誇張することによってすぐれた描写になっていることを指摘したものである。

(11) 羅韜『張九齢詩文選』(広東人民出版社、一九九四)は、「万木二句、万木逢春、抽出的新枝都柔軟得可以打結、漫山的花朶繁盛得像要燃焼一様。」と述べ、さらに、「敷、敷栄。開花的意思。」と言う。これに対して『張九齢集校注』は、「敷、都、全。」と言っている。これに従った。

(12) ただし、杜甫が一句中に対比的に用いている青と白については、これを対にする王維の詩の例は多い。何例か挙げておく。

青草粛澄陂　青草　澄陂に粛たり
白雲移翠嶺　白雲　翠嶺に移る
「林園即事、寄舎弟紞」(『全唐詩』巻一二五)

青菰臨水映　青菰　水に臨んで映じ
白鳥向山翻　白鳥　山に向かって翻る
「輞川閒居」(『全唐詩』巻一二六)

山臨青塞断　山は青塞に臨んで断え

江向白雲平　江は白雲に向かって平らかなり

「送厳秀才還嵩」（同前）

白雲廻望合　白雲　望を廻らせば合し

青靄入看無　青靄　看に入りて無し

「終南山」（『全唐詩』巻二二六）

(13) 高木正一『唐詩選　下』（朝日新聞社、一九六六）は、「……火のもえたつように赤く咲きほこる花を配した。その花は、おそらく桃の花だろう。」と言う。

(14) 朱綬については、例えば銭起「送河南陸少府」（『全唐詩』巻二三九）に、「雲間陸生美且奇、銀章朱綬映金羈」（雲間の陸生　美にして且つ奇なり、銀章の朱綬金羈に映ゆ）とある。しかし、劉開揚『岑参詩集箋注』は、五品官は黒綬という規定なので、朱綬は朱紱の誤りであるとする。

(15) 同様の発想で詠じられた詩に、林逋（九六七～一〇二八）の七絶「山中寒食」（『林和靖集』巻四）があり、「中林不是不禁火、其奈山桜発欲然」（中林　是れ火を禁ぜずんばあらざるに、其れ山桜の発きて然えんと欲するを奈せん）と言う。ただし、蒲積中撰『歳時雑詠』巻一三はこの詩を、劉筠の「山中寒食二首」〈其二〉として　収録する。

(16) 『唐詩紀事』巻七七と『全唐詩』巻八四九は処黙、もしくは僧処黙の詩とし、『文苑英華』巻三二九、『佩文斎詠物詩選』巻四八二は周紲の詩とする。

（北海道教育大学札幌校）